

アジア諸国と人権 (その二九)



研究センター所長
京都大学名誉教授

安藤 仁介

前回に指摘したとおり、ビルマは国土も日本の一・八倍とひろく資源にも恵まれた国です。国土の中心をイラワジ河が北から南へ流れ、この大河の流域には平地が広がり、下流のデルタは米の生産地として有名ですが、周辺地域には山岳が多く他国との国境となっています。六千万を超える人口の七〇％近くをイラワジ平野に住むビルマ族が占め、北部中国との国境地帯にカチン族、西部インドとの国境地帯にチン族、同じく西部バングラデシュとの国境地帯にラカイン族、東部ラオス・タイとの国境地帯にはシャン族、その南にはカレン族やモン族など多種多様な少数民族が住み、人口の二割以上を占める

の王朝はその後、チェンマイ、アユタヤ、ビエンチャンなどタイ族の諸王国を攻略して強大な王国を築き上げますが、相継ぐ遠征に国力を衰退させ、一七五二年には南方のモン族に倒されます。

このモン族に対抗して、三度目ビルマ族の覇権を確立したのがアラウンパヤで、かれはモン族との数年に及ぶ戦いに勝ち、一七五九年にはコンバウン王朝を建てます。コンバウン王朝は一貫して拡張政策を採り続け、六〇年代に八年間に及ぶ清の侵略を撃退して以降、ルアンプラハン、アユタヤ、アラカン(ラカイン)を征服して、広大な版図を築き上げました。しかし、こうした拡張政策は、西隣の大英インド帝国の利害と衝突し、一八二四年から三次にわたる対英戦争の結果、最終的に国王が英軍に捕らえられ、八六年にはコンバウン王朝は滅亡して、全ビルマが併合され大英インド帝国の一州となりました。ただし英国の放任経済政策は、住民の大半を貧困に追いやったため、一九三一年には農民一揆を誘発し、英国は同三七年にビルマをインドから分離したのです。

アウン・サンは英国の支配に抵抗する名門の出身で、ラングーン大学在学中に学生同盟の委員長となり一九三六年、後に首相となったウ・ヌーとともに学生ス

ほか、インド人や華僑も住んでいます。宗教的には、ビルマ族、モン族、シャン族はほぼ百％が仏教徒で人口の約八九％、インド系住民のヒンズー教徒とイスラム教徒が併せて四％、山地のカレン族やカチン族に多いキリスト教徒が二％を占め、それ以外の少数山岳民族はほとんどがアミニズムの信仰者です。

イラワジ河流域には、旧石器時代の終わりから新石器時代の初めにかけて人が住んでいた形跡があります。この地に政治的集団が形成されたのは、一・二世紀から九世紀ころまで栄えたピュー族の国家が始めてであろう、と考えられています。そして九世紀中頃、ピュー族の国家が中国雲南の南詔に攻め滅ぼされたのちに、ビルマ族がイラワジ平野に進出し、一一世紀にはパガンに王朝を樹立しました。しかしパガン王朝は、一三世紀後半に幾度も元の侵攻を受けて一二八七年には崩壊し、この地域の覇権は東部から進出してきたシャン族の手に移ります。シャン族は一四世紀後半にアバ王朝に統合されましたが、アバ王朝は一六世紀前半に他のシャン族集団に滅ぼされます。他方で、シャン族の支配を逃れて南下したビルマ族は、シッタウン河上流のタウングーに集結し、一六世紀半ばにはタウングー王朝を樹立します。こ

トライキを指導、卒業後は政治の道に進んで「われらビルマ人連盟」に入党し、英国からの独立を目指す地下活動に取り組みました。同四〇年には逮捕状を逃れて中国のアモイへ密入国し、そこで日本軍の特務機関と接触、その協力を得て翌年ビルマを脱出させた三〇人の青年とともに海南島で軍事訓練を受け「ビルマ独立軍」を結成、四二年には日本軍の侵攻に伴ってビルマに入り、バー・モウ親日政府の防衛軍司令官を務めます。しかし日本側の意図に不信を懐いたアウン・サンは四五年三月、抗日戦線「反ファシスト人民自由連盟」を組織して蜂起し、日本の敗戦後はこの組織の総裁として政権を担当することを英国総督に要請、翌四六年九月にはビルマ執行理事会副議長に任命されました。さらにロンドンで英国のアトリー首相と会談後の一九四七年一月二七日、一年以内のビルマ独立を取極めたアウン・サン・アトリー協定を公表しました。また同年四月の立憲議会選挙では上記の自由連盟が二〇二議席のうち一九六を獲得しました。しかしながら独立の準備手続に没頭していた一九四七年七月一九日、ラングーンで執行理事会を開催中、アウン・サンは六人の閣僚とともに政敵ウ・ソウの刺客に暗殺されたのです。